

吉田初三郎の鳥瞰図に描かれた福井の名所

Tourist attractions of Fukui in the bird's eye view illustrated by YOSHIDA Hatsusaburo

門井 直哉*
(教育地域科学部社会系教育講座)

1. はじめに

大正から昭和にかけて活躍した絵師に吉田初三郎(1884~1955)という人物がいる。浮世絵の伝統を受け継ぎながら、独自の鳥瞰的描法を確立し、「大正の広重」と呼ばれ人気を博した。当時は日本全国に鉄道網が張り巡らされていた時期であり、初三郎は折からの旅行ブームに乗って、全国各地の鉄道沿線や博覧会場などの観光案内図を次々と刊行していった。初三郎が生涯に手がけた作品は1600点以上にのぼるという¹。

初三郎の鳥瞰図の最大の特徴は大胆なデフォルメにある。アピールすべき対象を過剰なまでに強調する一方、余分なものは思い切って省略する。鳥の目線から描かれた風景ははるか遠方にまで及び、かつ大地の輪郭は大きく歪められて、見えるはずのないものまでが顔を覗かせている。初三郎の図絵はおよそ「正確な地図」とはかけ離れているが、圧倒的な説得力を持って我々に語りかけてくる。

大正2年(1913)、迪宮裕仁親王(後の昭和天皇)は男山八幡宮行啓の際、初三郎が描いた「京阪電車案内図」を見て、「是れは綺麗で解り易い。東京へ持ち帰って学友に頒ちたい」と述べられたという。この発言に、当時、商業美術の道を歩み始めたばかりの初三郎はいたく感激し、鳥瞰図絵師として身を立てる決意をした。以後、初三郎は日本全国名所図絵の完成を志し、「綺麗で解り易い」ことを自身のモットーとして、数多くの鳥瞰図を世に送り出していった。

さて、初三郎の福井県に関する作品は以下の7点がある。

- ①「天下の絶勝東尋坊 三国芦原電鉄図絵」(昭和4年)
- ②「天下の絶勝東尋坊 三国・芦原・永平寺案内図絵」(昭和5年)
- ③「福井県鳥瞰図」(昭和8年)
- ④「福井市鳥瞰図」(昭和8年、昭和10年再版)
- ⑤「若狭小浜町鳥瞰図」(昭和8年)
- ⑥「武生町鳥瞰図」(昭和8年)
- ⑦「福武電鉄南越鉄道沿線名所図絵」(昭和8年)

昭和8年(1933)の作品が多くみられるが、この年には福井平野で陸軍特別大演習が行われている。昭和2年(1927)の愛知県での陸軍特別大演習以来、開催府県の全域鳥瞰図を初三郎に委嘱することが恒例化し²、③はこれに倣った当時の県知事・大達茂雄の要請によって制作されたものである³。県内市町と私鉄沿線の名所を描いた④~⑦の作品も同年に制作されている。

これより早く、初三郎は①②の作品を描いているが、②は①とほぼ同じ構図と絵柄で再刊されたものである。ちなみに発行元は、①が京都電灯株式会社福井支社、②が京都の田中本店となっている。

①が刊行される前年の昭和3年(1928)、初三郎は「私の作り出さんとする名所図絵は単なる一枚

* KADOI Naoya (Department of Geography, University of Fukui, Fukui 910-8507, JAPAN)

のスケッチではなく、幾十枚幾百枚のスケッチが集まって其処に一個の鳥瞰的図絵を構成せんとするのである。即ち部分々々に就いては飽まで忠実な自然描写であるが、一度是を総合する時に於て、極めて人為的となり初三郎式となる。つまり私の個性が十分に画面に溢れてゐるのである」と述べている⁴。鳥瞰図の制作に際して実地踏査を欠かさなかった初三郎は、はたしてどんな場所を福井の名所とみたのであろうか。小稿では初三郎が初めて福井県を描いた作品①をとりあげ、昭和初期の県内の名所を紹介してみたい。

2. 「天下の絶勝東尋坊 三国芦原電鉄図絵」について

「天下の絶勝東尋坊 三国芦原電鉄図絵」（以下、「電鉄図絵」）は、三国芦原電鉄の開業に際し、同電鉄を経営する京都電灯株式会社福井支社が初三郎に制作を依頼したもので、昭和4年（1929）1月1日の日付で発行されている。標題にもなっている東尋坊のほか、三国芦原電鉄（福井―東尋坊口）とその姉妹線の越前電鉄（福井―大野三番）、および永平寺鉄道（永平寺口―永平寺門前）の沿線各地の観光名所が描写されている（図1～3）。

裏面には三国芦原電鉄の概説、および「三国芦原電鉄沿線名所案内」（以下、「沿線案内」）と題した写真つき解説、さらに初三郎自身によるエッセイ「絵に添へて一筆」が掲載されている。

なお前述のように、翌年にはこれとほぼ同じ構図と絵柄による「天下の絶勝東尋坊 三国・芦原・永平寺案内図絵」が京都の田中本店から刊行されている。「電鉄図絵」との違いは、①赤い太線で示していた私鉄路線を細線に変更、②昭和4年8月に開通した永平寺鉄道の路線（金津―永平寺口）を追加、の2点のみであるが、特定の鉄道会社の路線案内図的な性格は弱まり、より一般的な観光案内図に仕上がっている。

一方、裏面については、①三国芦原電鉄の概説から「越路の旅」と題した記事への差し替え、②「沿線案内」を「福井・芦原・三国・永平寺附近名所案内」と改題（内容は変更なし）、③写真の差し替え、④あわら節の楽譜を新規に追加、⑤「絵に添へて一筆」の新規書き下ろし、といった相違がみられる。

ところで、初三郎の鳥瞰図では、観光名所や交通機関の近くに、その名称を記したラベルが配置されているケースが多い。このラベルには、地名や施設名を記した長方形のラベルと、駅名を記した角の丸いラベルの二種類がある。このうち特に強調すべき主要な観光名所や駅名などについては、赤や青で着色され他との差別化が図られている⁵。「電鉄図絵」の場合、長方形の赤ラベルは主要な観光名所、丸い長方形の青ラベルは最寄駅や主要なターミナル駅を示している。なお、東尋坊はひととき大きな長方形の青ラベルで示され、傍らに「天下の絶勝」と書いた赤ラベルが添えられている。

表1は「電鉄図絵」中に長方形のラベルで示された観光名所（地名を含む）の一覧である。「電鉄図絵」の中には福井県内の名所はもとより、近県やはるか遠方の著名な名所までが盛り込まれている。その中には初三郎の画室があった愛知県犬山の日本ラインもしっかり登場している。

次に赤ラベルの付された観光名所を中心に、三国芦原電鉄および越前鉄道・永平寺鉄道の沿線地域の様子をみていくことにしよう。

3. 昭和初期の観光地

（1）三国周辺

「電鉄図絵」の左端部には、本図の標題となっている東尋坊が大きく描かれている（図1）。東尋坊は江戸時代より知られる景勝地だが、三国芦原電鉄の開通によって、芦原温泉の浴客など、関西や全国から本格的に観光客が集まってくるようになったという⁶。

「絵に添えて一筆」の中で、初三郎自身は次のように述べている。

表1 「電鉄図絵」にみえる名所

地域	青ラベル	赤ラベル	白ラベル	主要駅名
三国周辺	東尋坊	天下ノ絶勝 三国遊園地 海水浴場 汐見桜 三国神社	吉崎御坊 北潟湖 弁慶クグリ穴 屏風岩 崎浦ノ材木岩 亀岩 グラウンド 中学校 女学校	東尋坊口 三国町
芦原周辺	—	芦原温泉 芦原公園	鴨溜 福原劇場 郵便局 九頭龍川 小学校 町役場 布施田橋	芦原
福井周辺	—	新田塚 養浩館 福井城跡 佐佳枝廻神社 藤島神社 足羽公園 専照寺	西本願寺別院 吃又ノ墓 東本願寺別院 高田別院 鎮徳寺 白鬚神社 鶯ヶ関梅林 継体天皇石像 皇太子殿下御手植松 鴨溜 鮎川	福井
永平寺周辺	—	永平寺 レイロウノ滝 小舟渡遊園地	スキー場 電気浴場	永平寺口 永平寺門前 小舟渡
奥越周辺	—	平泉寺	六呂師ヶ原スキー場 宝物館 朝倉義景ノ墓 砂山公園 篠座神社 森山スキー場	勝山 大野三番
敦賀	—	—	—	敦賀
県外	—	—	樺太 北海道 日本アルプス 立山 富士写ヶ岳 白山 兼六公園 安宅関所跡 首洗池 実盛塚 那谷寺 日本ライン 伊勢神宮 伊吹山 琵琶湖 四国 九州 朝鮮 金剛山 天ノ橋立 出雲大社	(至東京) 新潟 直江津 金澤 名古屋 京都 大阪 神戸 (至浦塩清津方面)

表1 「電鉄図絵」にみえる名所

地域	青ラベル	赤ラベル	白ラベル	主要駅名
三国周辺	東尋坊	天下ノ絶勝 三国遊園地 海水浴場 汐見桜 三国神社	吉崎御坊 北潟湖 弁慶クグリ穴 屏風岩 崎浦ノ材木岩 亀岩 グラウンド 中学校 女学校	東尋坊口 三国町
芦原周辺	—	芦原温泉 芦原公園	鴨溜 福原劇場 郵便局 九頭龍川 小学校 町役場 布施田橋	芦原
福井周辺	—	新田塚 養浩館 福井城跡 佐佳枝廻神社 藤島神社 足羽公園 専照寺	西本願寺別院 吃又ノ墓 東本願寺別院 高田別院 鎮徳寺 白鬚神社 鶯ヶ関梅林 継体天皇石像 皇太子殿下御手植松 鴨溜 鮎川	福井
永平寺周辺	—	永平寺 レイロウノ滝 小舟渡遊園地	スキー場 電気浴場	永平寺口 永平寺門前 小舟渡
奥越周辺	—	平泉寺	六呂師ヶ原スキー場 宝物館 朝倉義景ノ墓 砂山公園 篠座神社 森山スキー場	勝山 大野三番
敦賀	—	—	—	敦賀
県外	—	—	樺太 北海道 日本アルプス 立山 富士写ヶ岳 白山 兼六公園 安宅関所跡 首洗池 実盛塚 那谷寺 日本ライン 伊勢神宮 伊吹山 琵琶湖 四国 九州 朝鮮 金剛山 天ノ橋立 出雲大社	(至東京) 新潟 直江津 金澤 名古屋 京都 大阪 神戸 (至浦塩清津方面)

東尋坊——それは世界の奇勝朝鮮金剛山中の絶景海金剛を、そのまゝ此處に移したやうなと言へば、識者は直ちに夫れとうなづいてくれるであらう。——あの元山と長箭との中間庫底にある金剛の関門叢石亭のすばらしい眺めは、それがそのまゝ此の東尋坊である。私は一昨年（1926）の秋、朝鮮総督府の委嘱により、つぶさに金剛山の勝をきわめ、其の雄大極まりなき大観に驚嘆禁じ得なかつたのであるが、今此の東尋坊を見て、まざまざと其の当時の感激を蘇らせ、交通至便な此の地に、此の絶勝のあることを限りなく喜ぶと共に、必ず世に紹介宣伝したいと決意したのであつた。

金剛山は朝鮮半島を北から南に走る太白山脈にある景勝地で、朝鮮では古来白頭山と並ぶ名山とされてきた。標高 1638 メートルの主峰毘盧峰の西側を内金剛、東側を外金剛、その余脈が東海に没して隆起した山体を海金剛という。その海金剛の北端にある叢石亭は、玄武岩の柱状節理が織り成す様々な奇勝が続く名所として知られている。昭和 2 年（1927）に朝鮮へ渡り、「朝鮮金剛山交通大鳥瞰図」を製作していた初三郎は、東尋坊を目の当たりにし、海金剛の叢石亭に酷似した眺望に驚嘆したという。

「電鉄図絵」の上端部の隅には、遙か遠方にあるはずの樺太や朝鮮が描かれている。そして朝鮮の右隣にはかの金剛山も顔を覗かせている（図 3）。金剛山に比肩する天下の絶勝・東尋坊——初三郎らしい遊び心の中にも、東尋坊の宣伝にかけける意気込みが伝わってくるようである。

さて、東尋坊の背後に描かれているのは雄島であり、大湊神社の鳥居と社殿がみえる。現在、雄島は雄島橋によって安島地区と結ばれているが、昭和 4 年（1929）当時、島と陸地を結ぶ橋はまだなかった。雄島橋の架橋は昭和 12 年（1937）のことである。

一方、三国芦原電鉄の終点・東尋坊口駅から東尋坊へと向かう道沿いには三国遊園地がみえる。広大な敷地の中には別荘らしき建物やグラウンドが描かれている。ただし、東尋坊口駅の開業は昭和 7 年（1932）のことであり、「電鉄図絵」にみえる東尋坊口駅周辺の景観は将来の開発計画を示したものとみられる⁷。実際に東尋坊口駅ができると、駅前には広場として整備され、夏には花火大会やお化け屋敷⁸、浪曲・講談などが演じられる納涼場が建ったという⁹。

東尋坊口駅は海水浴場への最寄り駅でもあり、多くの人出で賑わった。「沿線案内」は三国海水浴場について、「砂は銀色、水は琅玕、浪穏やかに遠浅で、北陸には稀らしい好海水浴場、設備も亦完全し夏期は諸方からあらゆる階級の人達が集つて、華やかな海水着にロマンスの花を咲かせる。」と記している。

なお、三国町駅（後に電車三国駅と改称）から東尋坊口駅までの区間は、戦局の緊迫化にともない、昭和 19 年（1944）1 月に不要不急線として運行が休止され、軌道も撤去された。「電鉄図絵」に描かれた東尋坊口駅前の遊園地付近は、現在は住宅地（京福団地）となっている。

九頭竜川の河口部、竹田川との合流点付近には汐見桜が描かれている（図 2）。汐見桜は、明治 40 年（1907）、防風林として九頭竜川右岸の堤防上に吉野桜の苗木 300 本が植えられたもので、その後、北陸屈指の桜の名所へと成長した。花見の時期には多数のボンボリが添えられ、花相撲や自転車競技などの催しもあった¹⁰。「沿線案内」には、「白砂絵の如き洲浜と、浪洗ふ灯台に彩られた三国港口より九頭龍の大河を顧みるとき、其処には蘆荻しげる一州を隔てて、新保の長橋（長さ六町余）虹霓の如く架り、見遙るかす右手の河畔一帯、十数町に渉つて有名な汐見桜が北陸一の名花と誇つて、春爛漫の候には花雲に蝶を生む一大トンネルを現出するのである。水光花影長橋と相映じて春は遠近よりの遊覧者後をたゞず、諸種の催し物等もあり、越路の春は此の一角に集つたかの観がある。」と紹介されている。

なお、汐見地区の集落は竹田川の河道拡幅工事のため、平成 10 年（1998）に隣接する川崎地籍へ全戸移転となった。また、汐見地区と三国町を結んだ汐見橋も平成 12 年（2000）に撤去された。集落の跡地は汐見公園として整備され、現在は平成 15 年（2003）に植栽された「友愛の汐見桜」があ

る¹¹。

汐見橋より上流側にみえるのは栄橋である。その突き当たりには三国神社が描かれている。「沿線案内」は、「社境は殊に風致に富み、又境内に松平春嶽公を祀った木立神社がある。例祭みくにまつりは毎年五月廿日、各区より華麗な武者人形や山車を曳き出し、折節初夏新緑の爽やかな天地を海港に豪華な気分で彩るのである。」と記している。

（２）芦原周辺

「電鉄図絵」の中央部付近には芦原温泉が大きく描かれ、町中のいたるところで湯煙が立ちのぼっている（図２）。市街地を望む丘陵上には桜が咲き誇る芦原公園、そして芦原駅に隣接した遊園地が、赤ラベルの観光名所として示されている。温泉街のはずれには、昭和 19 年頃まであった「福原劇場」なる洋風建築の劇場がみえ、さらに郊外には鴨溜が描かれている。

芦原温泉が発見されたのは明治 16 年（1883）のことである。当時、周辺は人家のない全くの水田地帯であったが、温泉の発見からほどなく市街地が形成された。明治 44 年（1911）には北陸線三国支線が開通したことで、芦原への交通の便が向上し、昭和初期には北陸屈指の温泉街へと成長を遂げていた。「沿線案内」には、「駅前数歩にしてズラリと並んだ堂々たる内湯旅館の数々、ホームから浴槽へ導くものと他の案内書が云ふのも強ち過言ではない。いかにも明るい新進の気にみちた、一寸小別府といったやうな感じ。北に松林の茂った丘陵を控へて、三面は宏潤な田園、其の中を湯気を立てゝ川が流れる。街区も整然として美しい。（中略）第一に交通の至便と客舎の完備、夫れに待遇の懇切、宿料の低廉、食膳の新鮮豊富といったような条件を悉く備へて、其上附近には探勝遊覧の名所名勝の数が多く、北陸七湯中でも首位に置かれる繁盛ぶりである。」とある。なお、北陸七湯とは、石川県の山中・山代・片山津・栗津・和倉、富山県の宇奈月、そして福井県の芦原のことである。

芦原温泉は昭和 31 年（1956）、市街地の 8 割を消失する大火に見舞われ、これを契機に市街地の区画整理が行われた。忠魂碑のある一角は今も舟津温泉公園として残っているが、駅付近の噴水広場は既になくなっている。芦原公園もすっかり寂れて、今では訪れる人はほとんどいない。なお、かつて駅裏にあった遊園地には、現在、公民館・図書館・テニスコートなどの公共施設が立地している。

（３）福井周辺

「電鉄図絵」の右端付近には、三国芦原電鉄の起点となる福井駅が表示され、その周辺に福井市街地が大きく描かれている（図３）。赤ラベルが付された観光名所としては、堀と石垣が残る福井城跡、福井藩主の別邸であった養浩館、藩祖・結城秀康と幕末の名君・松平春嶽を祀る佐佳枝廻社、南朝方の武将・新田義貞の戦歿地にある新田塚、その義貞を祀った藤島神社、継体天皇石像や皇太子殿下御手植松がある足羽公園、浄土真宗三門徒派の本山・専照寺がみえる。

なお、足羽公園は、明治 42 年（1909）、皇太子（後の大正天皇）行啓を記念して、足羽山山頂の継体天皇像を中心に整備されたもので、継体天皇像はこれに先立つ明治 17 年（1884）に、笏谷石の石工によって建てられた。皇太子殿下御手植松は今はなく、記念碑のみが残されている。

その他、白ラベルが付された名所としては、浄土真宗本願寺派の西別院、浄土真宗大谷派の東別院、浄土真宗高田派の高田別院、延喜式内社の白髭神社、曹洞宗の鎮徳寺などの寺社がある。鎮徳寺は、天正 2 年（1574）の一向一揆により焼亡した永平寺が、当地に逃れて新永平寺と号したのが始まりである。織田信長による一揆平定の後、永平寺は旧地に戻って再建され、新永平寺は北庄城の鬼門鎮護として鎮徳寺と改称された。また高田別院は、昭和 4 年（1929）当時は宝永上町（現・福井市宝永）にあったが、現在は福井市花堂南にある。

「電鉄図絵」には鴨溜や鶯ヶ関梅林など、今はもう存在していない名所もみえる。鴨溜は、足羽山西麓にある約 82 町の田に堰を設けて水を張り、冬季の鴨の猟場としたものである¹²。「沿線案内」には、「旧藩時代からの藩士の鴨猟場で今も猶銃砲を以て獲ることを禁ぜられた禁猟区である。夜間諸方へ四散して餌を漁りに出かけた鴨は、昼間はこの保護せられた鴨溜に帰つて、悠々幾千幾万ともなき

大群をなし、囂々として群居する様は全く他で見ることの出来ないもの、其の獵獲法も亦福井藩独特のもので、夕刻鴨の出立、朝方鴨の帰来を谷間に待受け、倒三角形の張網を天空へ垂直に突き上げて、真に一呼吸の間、飛来する鴨の首を網の目に突込ませるといふ、頗る原始的な野趣に充ちたものであるが、練達の士は一冬に易々として数十羽を捕獲するのである。日中此の溜りに人が近づいても、多年の保護に馴れて家鴨の如く馴れ親しみ、其の大群は無慮万を以て数ふべく、唯見る一面の鴨の溜である。」と紹介されている。この鴨獵は昭和 10 年（1935）まで続いたが、その後は途絶えて、昭和 20 年（1945）以後は堰もなくなった¹³。

一方、鶯ヶ関梅林については、「沿線案内」では触れられていない。足羽山西麓の玉井町（現・福井市足羽）にあったようだが、いつ頃なくなったのかは定かでない。明治 42 年（1909）に発行された『福井案内記』には、旧蹟の項に鶯ヶ関がみえ、「足羽山の西麓にある、今は梅屋敷となつてある、鉄幹嵯峨として玉寒を綴り香韻馥郁として春信を報する頃は、雅客の来り訪ふもの多く、此邊は昔し伊勢町といふた時分には役者芸人が多く住んでゐたが、十四五年前は玉井町とて一部の遊郭であつた更闌け月冴え蘭燈影微かなるときは、雪満山中高士臥、月明林下美人来。の趣がなきにしも非ずであつた。」と記されている¹⁴。

「電鉄図絵」には、他にも「吃又ノ墓」なるものがみえる。吃又とは近松門左衛門の浄瑠璃「傾城反魂香」に登場する絵師・吃の又平のことである。もっとも、ここでは吃又のモデルとなった岩佐又兵衛（1578～1650）を指している。

岩佐又兵衛は浮世又兵衛とも呼ばれ、浮世絵の創始者とも目される人物である。長く福井で活動した後、晩年は江戸に招かれ、かの地で死去したが、遺言によって墓は福井の興宗寺に建てられた。「大正の広重」を自称し、浮世絵の伝統を意識していた初三郎にとって、岩佐又兵衛の墓は当然取り上げるべき福井の名所であつたのだろう。

なお、又兵衛の墓は、興宗寺の旧境内である宝永小学校の敷地内にあつたが、昭和 62 年（1987）に南東角向かいの現・興宗寺境内へと移された。かつて墓があつた場所には「岩佐又兵衛の墓跡」の石碑がある。

（４）永平寺周辺

曹洞宗の大本山・永平寺は東尋坊と並ぶ、福井の代表的な観光地である。「電鉄図絵」では、永平寺境内は大きく拡大され、伽藍の配置が詳細に描出されている（図 2）。永平寺の右隣で、さながら大瀑布の様相を呈している「レイロウノ瀧」とは、永平寺境内を永平寺川に沿って寂光苑へ向かう途中、白雲橋の上にある玲瓏の滝である。「沿線案内」には、「吉祥山永平寺は人も知る曹洞宗の大本山、山門の楣間高く掲げられし後円融天皇宸翰の勅額に示さるゝ如く実に日本曹洞宗第一道場である。寛元二年（約六百八十年前）道元禅師の創建以来法燈相亜いで今日に至るもの、末寺一萬五千信徒百萬戸と称せられ、境内十萬坪、大小七十余棟の堂塔伽藍を連ねて山溪にわたり、結構雄大壯麗を極めた海内屈指の巨刹で、翠巒に倚り溪流を帯んで一聲の山鳥翹を叩くところ晨鐘夕梵おのづから塵境を離るゝの感深く、参拝者四時其の後を断たない。」と紹介されている。

永平寺の左方、越前電鉄の小舟渡駅前には小舟渡遊園地が描かれ、園内には電気浴場やスキー場もみえる。小舟渡駅周辺は沿線随一の観光地であつたようで、「沿線案内」には、「当電鉄の経営にかかる眺望雄大の一大遊園地で、脚下には九頭龍川に架した壯麗なる小舟渡橋を眺め、仰げば越の白山、秀麗無双の勇姿を雲の彼方に現す等、山水の景觀雄大の二字に尽きてゐる。園内には清泉あり飛瀑あり溪流あり旗亭あり、老杉桜樹の間楼台相映じて、又瀟洒清麗なる電気浴場もあり。直営食堂もあつて美味手軽と低廉を信条として来遊者の好みに応じてゐる。其他対岸には設備完全したグラウンドもあり、殊に夏は名にし負ふ九頭龍の鮎、浚刺として食膳を賑し、小舟渡橋の下流は好水泳場として少女達にも安全第一の遊び場となる。後山のスキー場は傾斜緩く、初心者練習場として最も詔向の所である。此の自然の大風光と社營の設備とは相俟つて御家族連れ一日の清遊に、又は各種の集会

に、常に利用されて北陸都人士四時の楽園となつてゐるのである。」と記されている。

小舟渡遊園地は戦後、京福電鉄の子会社が経営するかまぼろ温泉となったが、平成 14 年（2002 年）に閉鎖された。現在、園内の施設は撤去され、小舟渡駅周辺はもはや往時の賑わいも想像できないほど静かな佇まいを見せている。

（５）奥越周辺

奥越の名所で赤ラベルが付されているのは平泉寺のみである（図 2）。ただし、平泉寺の描写は、永平寺に比べると極めて簡素である。「沿線案内」では、「史上著名の古刹で僧泰澄の開基になる霊域。源平の昔より南都北嶺にも譲らざる僧兵蟠踞の地として曾つて元龜天正の昔には四十八社三十六堂六千坊、峯々谷々に満ちわたつたのであるが、今は僅に其の面影をとどめるのみ、しかすがに菩提林の雄大、境内の老杉青苔等、そゞろ往時の盛況を偲ばしめるに充分である。」と紹介されている。

平泉寺の手前にみえるのは六呂師スキー場である。なお、「電鉄図絵」はおおよそ西から東を望む構図となっているので、六呂師スキー場は本来ならば、平泉寺よりも後方に位置するはずである。もとより「大胆なデフォルメ」は初三郎の鳥瞰図の特徴であるが、その点を考慮するにしても、本図における位置関係は実際とはだいぶ異なっている。

さて、日本で初めてスキーが紹介されたのは明治 44 年（1911）のことである。オーストリアの軍人レルヒ少佐が新潟県高田の歩兵 58 連隊にスキー指導を行ったのが始まりで¹⁵、大正から昭和初期にかけては一般にもスキーが普及しつつあった。この新しいスポーツは、外来者が近寄らない雪山を観光地へと変貌させ、中でも六呂師スキー場は、県内はもとより、北陸においても著名なスキー場の一つとなっていた。「沿線案内」は「六呂師スキー場は北陸に於ける唯一の大スロープを有するので特に名高く、広袤実に百萬坪、十二月中旬より三月中旬に至るまで積雪五六尺を下ることなく、附近一帯の山野満目白皚々として一樹の影だに止めず、起伏連互する丘陵は或は急、或は緩、思ひのまゝのスロープをひた一文字に滑走するの壮快さは、広大を以て誇りとする当スキー場に於てのみ味得せらるゝ所であらう。宿舎は附近の民家が快く需めに応じてくれる。」と記している。

また、「電鉄図絵」にはもう一ヶ所、森山スキー場も描かれており、「沿線案内」は「道路平坦、面積十萬坪、緩急各の斜面を有して初心熟達何れの人にも適し、例年スキー講習会、大会等が催され、六呂師に次ぐ好スキー場として年々世に知られてゆく。」と紹介している。

このほか奥越では、大野城跡にある亀山公園、戦国大名・朝倉義景の墓、延喜式内社の篠座神社、清滝神社・洞雲寺付近（大野市清瀧）の砂山公園などが白ラベルで表示されている。なお、「沿線案内」は白山についても、「越に名を得し白山は我国屈指の名山——海拔八千九百十六尺、加能越美飛の諸州眼下に雌伏して其の英姿を仰ぐ——其の白山登山には、当越前電鉄によるを最も便利とする。」と記し、勝山から谷峠を越えて石川県の牛首に出て、山麓の白山温泉へ向かうルートを紹介している。

4. 結びにかえて

最後に「電鉄図絵」に描かれた鉄道のその後についても簡単に触れておきたい。

昭和 17 年（1942）、京都電灯は戦時の配電統制により解散することになり、鉄道事業は新たに設立された京福電気鉄道に継承された。これにともない、越前電鉄と三国芦原電鉄はそれぞれ同社の越前本線、三国芦原線となった。昭和 19 年（1944）1 月には三国芦原線の電車三国—東尋坊口間が不要不急線として休止される一方で、同年 10 月に休止された国鉄三国線（金津—三国港）の三国—三国港間が京福電鉄の路線として開業した。また、同年 12 月には丸岡鉄道（西長田—本丸岡）と永平寺鉄道（金津—永平寺[旧：永平寺門前]）が京福電気鉄道に吸収合併され、それぞれ同社の丸岡線、永平寺線となった。

昭和 40 年代に入ると、昭和 43 年（1968）には丸岡線、翌 44 年（1969）には永平寺線の金津—東

古市[旧：永平寺口]間、昭和 49 年（1974）には越前本線の勝山—京福大野[旧：大野三番]間が立て続けに廃止となり、京福電鉄の路線は大幅に縮小することとなった。そして、平成 12 年（2000）と翌 13 年（2001）の二度にわたって起きた列車衝突事故を契機に、平成 14 年（2002）には永平寺線で残されていた東古市[現：永平寺口]—永平寺の区間も廃止となった。越前本線と三国芦原線は平成 15 年（2003）からは京福電鉄から第三セクターのえちぜん鉄道へと引き継がれ、現在に至っている。

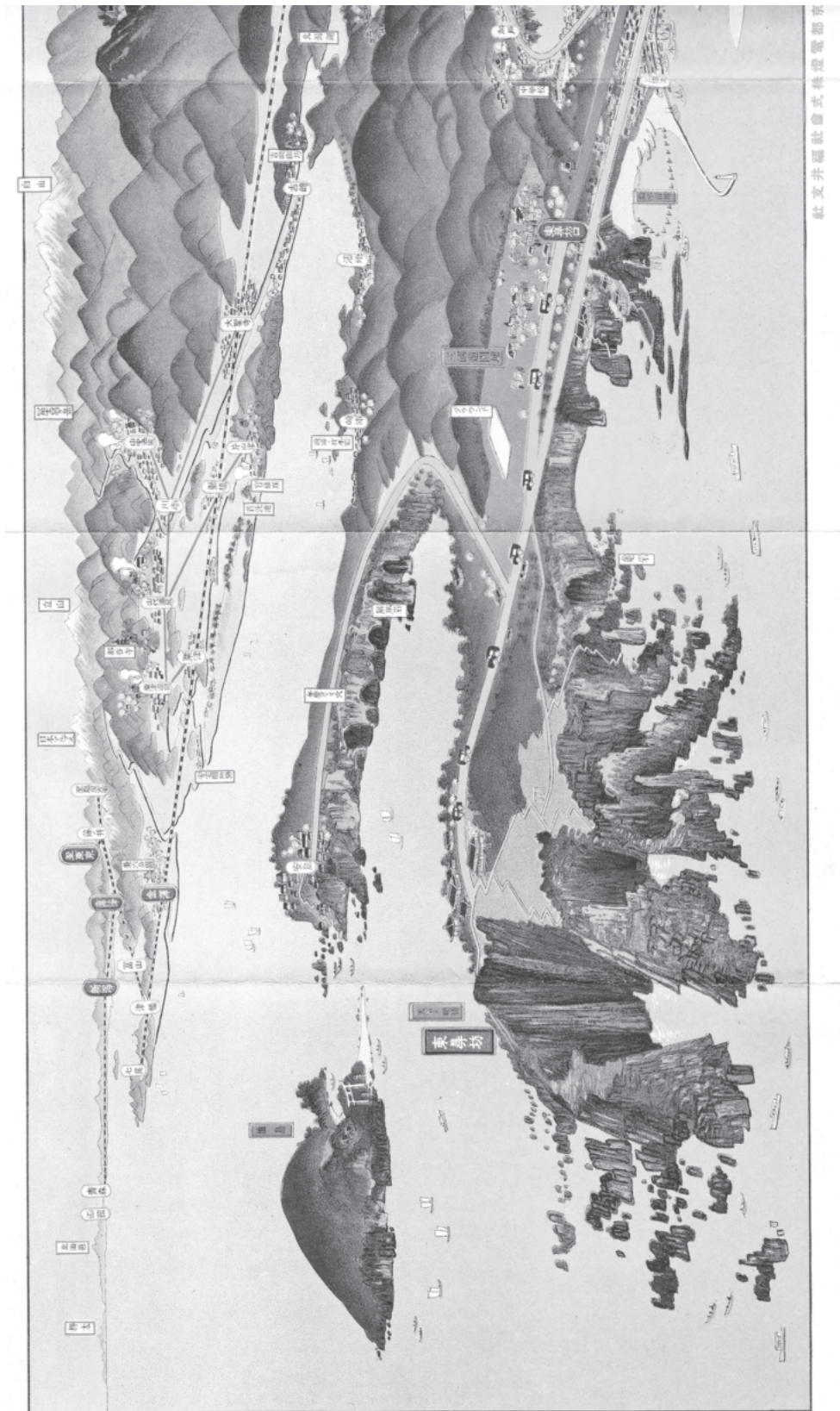
吉田初三郎が「電鉄図絵」を描いた当時は、まさに県内の鉄道網が発展のピークにさしかかる頃であった。「電鉄図絵」に描かれた観光名所は、どこもかしこも心を浮き立たせるような、明るい雰囲気満ちている。しかし、日本はやがて昭和恐慌を経て、戦争へと突入し、観光は低迷する。戦後は再び観光が盛んとなるものの、モータリゼーションの進展により、鉄道網は衰退を余儀なくされた。

東尋坊、芦原温泉、永平寺は今も昔も変わらぬ福井の観光名所である。しかしその一方で、現代ではほとんど見向きもされなくなった名所も少なくない。今や観光という行為は広く大衆化し、娯楽性がより強く求められるようになってきている。初三郎の鳥瞰図に描かれた往時の名所をみるにつけ、時代の変化を痛感する。

<付記>

本稿に掲載した「天下の絶勝東尋坊 三国芦原電鉄図絵」は、個人蔵の資料を使用している。

- 1 諸橋辰男「大正広重 昭和源内」（『大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎のパノラマ地図』、平凡社、2002 年）116 頁。
- 2 吉田初三郎研究プロジェクト「吉田初三郎年譜」（『大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎のパノラマ地図』、平凡社、2002 年）92 頁。
- 3 福井県立図書館「ふるさと再発見 ふくいパノラマ地図 吉田初三郎の鳥瞰図」、2008 年。
- 4 吉田初三郎「如何にして初三郎式鳥瞰図は生れたか？」（『旅と名所』創刊号『観光』改題 22 号、1928 年）10-11 頁。
- 5 ①日下部聡・松浦健治郎・横田嘉宏・浦山益郎「昭和初期における官庁街の空間構成を分析する資料としての吉田初三郎鳥瞰図の可能性」、日本建築学会東海支部研究報告集 42、2004 年、687 頁。②松浦健治郎「吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成—近世城下町を基盤とする県庁所在都市 18 都市を対象として—」、日本建築学会計画系論文集 602、107-108 頁。
- 6 三国町百年史編纂委員会『三国町百年史』、1989 年、463 頁。
- 7 「電鉄図絵」では、三国芦原電鉄の西長田駅から九頭竜川沿いの布施田を結ぶ計画路線が破線で示されているが、この区間の鉄道建設は実現しなかった。
- 8 三国町史編纂委員会『新修三国町史』、1983 年、674 頁。
- 9 十一徹郎「三芦線東尋坊口」（三国今昔懇話会「みくに今昔あれこれ」その七、2002 年）69-70 頁。
- 10 前掲注 8、588-589 頁。
- 11 小林真一「三国町汐見区の時の流れ」（三国今昔懇話会「みくに今昔あれこれ」その九、2004 年）43-55 頁。
- 12 現地案内板の解説による。
- 13 前掲注 12。
- 14 『福井案内記』（杉原丈夫編『明治年間 福井・敦賀・小浜案内記』松見文庫、1973 年、所収）、189 頁。
- 15 福岡孝純「スキー」『日本大百科全書』、小学館、1998 年。



— 117 —



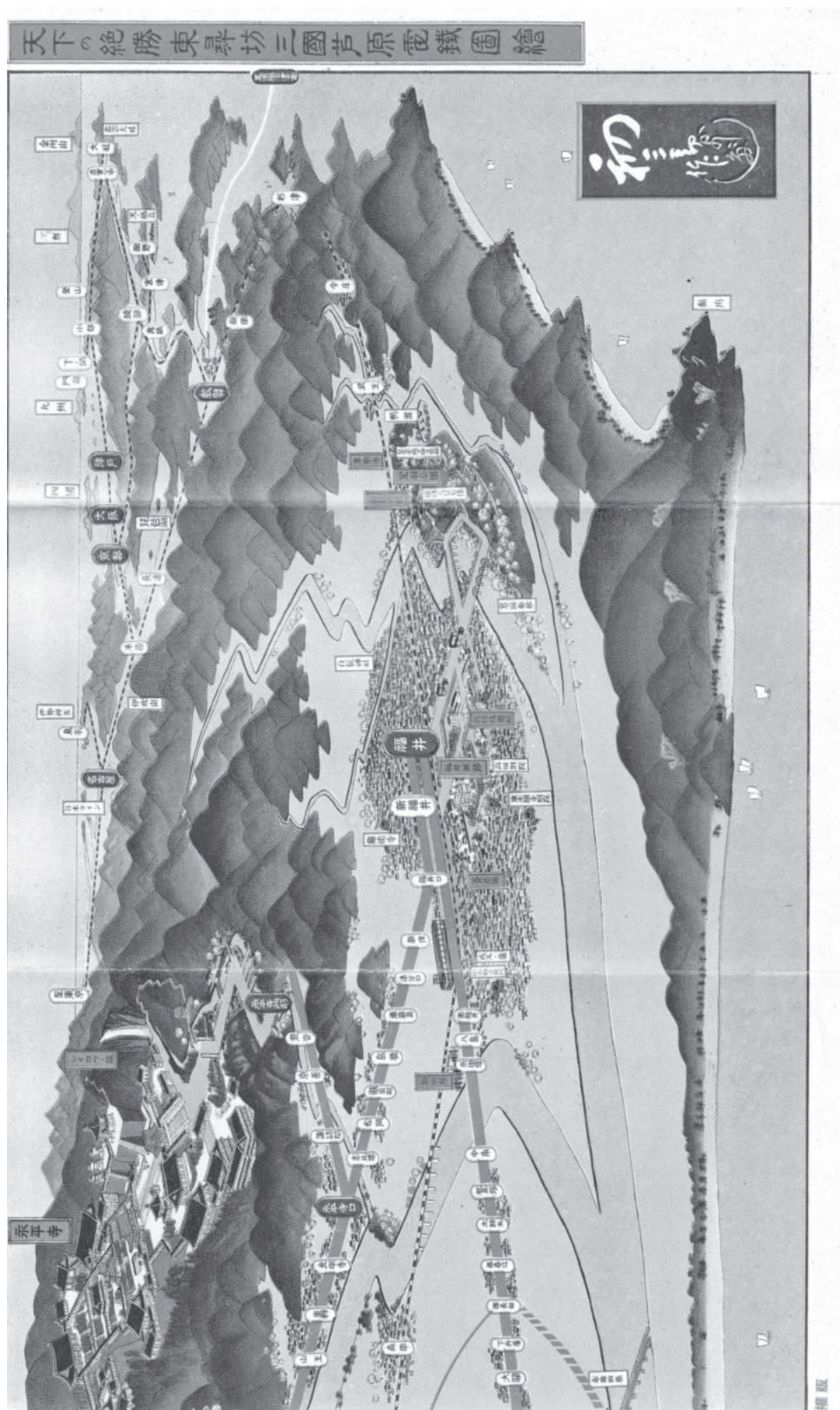


図3 「電鉄図繪」の右側部分

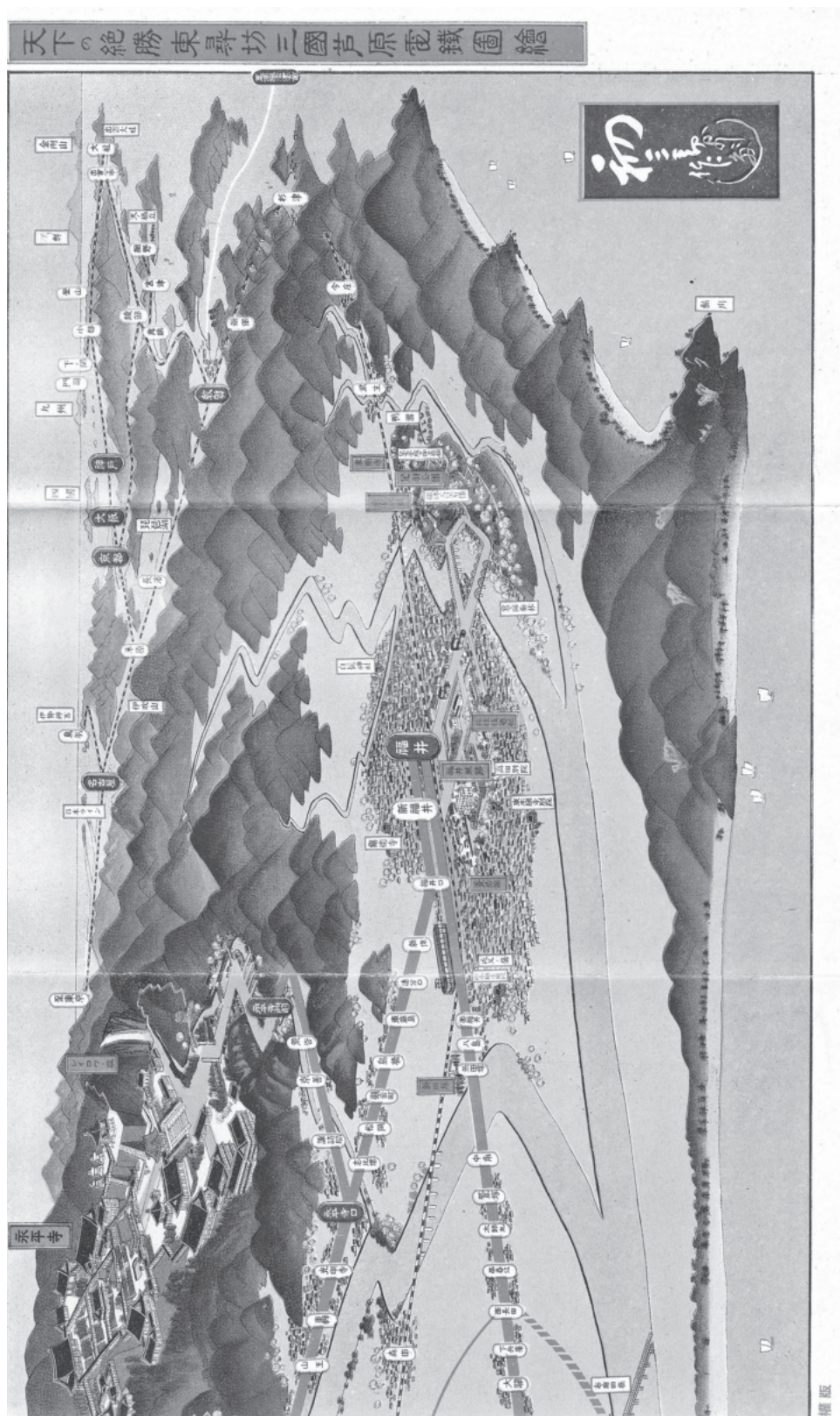


図3 「電鉄図繪」の右側部分